「人形劇場かにこぞう」、一人劇団から夫婦の劇団へ

主役は妻、いきいきとした姿を見守る

「ぼくも舞台に立つと思われると困る」と照れながら、取材用に用意してくれた自宅の舞台に立つ大﨑 敏行さん(左)と省子さん

伊勢町在住の大﨑（おおさき） 省子（せいこ）さん(68歳・県人形劇連絡会代表)は、一人で「かにこぞう」という人形劇団を主宰しています。でも、数年前から、こっそりもう一人の団員さんが仲間になっていました。

省子さんの夫、敏行（としゆき）さん(69歳)です。

人形も持たないし舞台にも立たないけれど、荷物を運んだり舞台袖で省子さんの劇進行を補助したり、ときには公演の依頼者と話したり。

今回は、子どもたちに物語と笑顔を届ける人形劇団のご夫婦を取材しました。

かにこぞうの公演（2月・市内幼稚園）

「かにこぞう」で演じる人形たち。師匠から引き継いだり自分でリメイクしたり、一番古いものは50歳になるといいます。

夫婦の始まりは夢との別れ 諦めきれずに落ち込む日々

省子さんが主宰する人形劇団「かにこぞう」の公演活動を裏方で支えてくれる心強い敏行さんですが、ここまで来るにはご夫婦の長い物語がありました。

大﨑さんご夫婦は大阪出身です。省子さんは独身時代にプロの人形劇団に所属して巡回公演などを行っていました。「人形劇なんて子どもだまし」くらいに思っていた敏行さんに説得されて、人形劇を諦め結婚を機に退団することになりました。

敏行さんの仕事の都合で滋賀県に来て、伊勢町に生活拠点を構えたのは数年後のことです。双子が生まれ、家事に子育てに夢中で過ごしていた省子さんは、子どもが少し大きくなって手が離れると、知り合いもいない生活が辛くなり、沈みこむことが多くなってしまいました。

省子さんの様子を心配した敏行さんは、仕方なくボランティアやサークルとしてなら、と再び人形劇をはじめるのを許すことにしました。

情熱と真剣さでプロへ 一人劇団「かにこぞう」

文化活動のサークルボランティアに参加して、人形劇を再開した省子さんは、みるみる元気を取り戻していきました。子どもと家族で本格的な人形劇の舞台を鑑賞する機会ができると、大人も感動する舞台芸術だと知り〝子どもだまし〟の偏見は消えました。

手伝いはじめたころは、公演の会場で園児に「おじいちゃん」と声をかけられ「誰のおじいちゃんや」と大人気なく口答えしていました。最近は園児に声をかけられると、受け入れられたのやなと嬉しくなります。変わったのは孫が生まれてからかなぁ。

私は恥ずかしがりやで気が小さい。度胸がないから人形劇で演じるのが好きなの。人形を使って別人になれるもの。

劇団の名前はね、子どもが小さい時に手づくりのカニ枕をいつも引きずって歩いておじいちゃんに「かにこぞう」って呼ばれていた思い出からつけました。

何より敏行さんの心を解かしたのは、どんなことがあっても公演をやり遂げ、見ている人たちと空間・時間を共有して楽しんでいる、省子さんの人形劇に対する情熱と姿勢でした。そして、ついに「お前は一人でも全部できる。意識を大事にしてやれ」と妻の背中を押しました。こうして省子さんは一人人形劇団「かにこぞう」として活動することになりました。

「男の人が仕事をするように、ド真剣にやっているうちに主人も理解してくれるようになりました」と省子さんは振り返ります。

主役は妻、主役は人形 隅から見守る幸せ

定年を迎えた敏行さんは、少しずつ省子さんの公演を手伝うようになりました。舞台や人形を運んだり、客席から離れた隅っこで、妻の公演と喜ぶ子どもたちの姿を見守っていたり。

敏行さんは「人形劇の主役は家内。いきいきと元気でいてくれる。そうすると私も好きなことができるし、幸せやなぁと思います。それが私にとって人形劇の魅力」と話していました。

省子さんは「公演で集中するとほかに何も見えなくなります。人形と役とお客しかいない、誰にも邪魔されない世界です。これからも全国の人形劇を見に行きたいし、公演ビワイチもしてみたい。早くコロナが収束して人形劇をしたい」と、人形劇への情熱は膨らみ続けています。

大﨑さんご夫婦の物語。敏行さんは「昔から夫婦は〝破れ鍋に綴じ蓋〟といいます。二人とも正反対の性格で、似ているのは最善を尽くしてキリギリスのように楽しく生きようという所です」と話していました。